

# カンボジアにおけるトウモロコシの生産と流通

たか 高      はし 橋      たもつ 保

## は し が き

トウモロコシは、近年のカンボジア経済において、米、ゴムと並んで最も重要な輸出農産物となっている。すでにこの国では、第2次世界大戦前に非常に大量のトウモロコシが生産され輸出されていたことがよく知られており、これに比べれば現在の生産高は当時の半分の水準にすぎない。

独立後のカンボジア政府は、自立経済達成のための農業開発政策推進の一環として、この過去に実績のあるトウモロコシの増産に種々の努力を払ってきたのはもちろんであるが、とくに1963年11月、アメリカの軍事・経済援助の全面的拒否と前後して断行した貿易、銀行、保険の国有化措置による「経済改革」以来、自立更生経済実現のための主要外貨獲得源として、とくに米、ゴム、それにこのトウモロコシなど農産物の増産を最優先させる経済政策をとってきた。こうして一方で生産面での増強策を推進しながら、これと並行的に他方では貿易国営化に次ぐ措置として、従来から農産物の集荷においても種々の難点のあった国内流通機構の整備・改革が推進されている。

そこで以下には、こうした輸出農産物としてのカンボジアのトウモロコシの生産と集荷・流通について、その歴史的背景、現状の概観、およびそこでの若干の問題点について、筆者なりに整理紹介し、これに対する見解を述べることにしたい。

## I トウモロコシ生産の歴史的背景

### 1. 第2次世界大戦前の時期

カンボジアを含む旧フランス領インドシナ（現在の南北ベトナム、カンボジア、ラオス）のトウモロコシは、1900年ごろまでは現地消費のためにだけ栽培されていたが、1904年ごろフランスが貿易商品として、このトウモロコシに興味を示すようになってから急激に増産されはじめ、1905年に1万6000トンにすぎなかったトウモロコシ輸出高が、1910年には8万4000トンとなり、さらに1929年には14万トンを算するにいたった。さらに第2次世界大戦開始直前の1937年に至ると、フランス領インドシナのトウモロコシは作付け面積40万8000ヘクタール、生産高62万3000トン、輸出量57万5000トン（価額4億6650万フラン）という実績を示すにいたった。

こうしたフランス領インドシナのトウモロコシ生産において、最も重要な地位を占めたのは、ほかならぬカンボジア産トウモロコシであった。カンボジアのトウモロコシ生産は1930年代にはいって、インドシナの他の諸国よりも特に急激に進展を示し、前掲1937年の場合には作付け面積において20万ヘクタールと、全フランス領インドシナの49%を占め、生産高においては40万トンと実に64%を占めるにいたったのである。これはカンボジアに次いで多いトンキンのトウモロコシ生産が

第1表 第2次世界大戦前のフランス領インドシナ各邦におけるトウモロコシ生産

(単位: 1000ヘクタールおよび1000トン)

	トンキン		アンナン		コーチシナ		カンボジア		ラオス		全インドシナ	
	作付け面積	生産高	作付け面積	生産高	作付け面積	生産高	作付け面積	生産高	作付け面積	生産高	作付け面積	生産高
1928/29~32/33平均	66	102	48	50	12	11	37	49	49	39	212	252
1933/34	58	98	55	58	18	16	100	170	51	40	282	382
1934/35	80	75	75	80	18	18	120	300	40	40	333	513
1935/36	80	97	71	64	17	20	125	290	11	10	304	481
1936/37	83	81	80	90	23	20	130	260	10	9	326	460
1937/38	86	101	80	85	33	27	200	400	9	10	408	623
1938/39								360				
1939/40								340				

(出所) 逸見重雄, 『仏印の統済資源』。原資料は *International Yearbook of Agricultural Statistics 1938-39*, pp. 282~383。カンボジアの1938/39, 1939/40年度の生産高は *Annuaire Statistique Retrospectif du Cambodge 1937-57* による。

第2表 戦前のカンボジアのトウモロコシ輸出の全インドシナのトウモロコシ輸出に占める地位

(単位: 1000トン)

年次	全インドシナの輸出高 (A)	カンボジアの輸出高 (B)	(B)/(A) (%)
1922		8	
1925	57		
1926	65		
1927	58		
1928	128		
1929	147	46	31.2
1930	122	61	50.0
1931	96		
1932	176		
1933	298		
1934	476		
1935	417		
1936	476	250	52.5
1937	575	385	66.9
1938	557	367	65.9
1939	450	340	75.6

(出所) 満鉄, 『南洋叢書第2巻, 仏領印度支那篇』(原資料は, *Tableau du Commerce Extérieur de l'Indochine, 1938*), Yves Henry, *Economie Agricole de l'Indochine*, および *Royaume du Cambodge, Annuaire Statistique Retrospectif du Cambodge 1937-57* より作成。

第3表 インドシナ産トウモロコシの全輸出に占める対フランス輸出の比重

(単位: 1000トン)

年次	トウモロコシ全輸出量 (A)	対フランス輸出品			(B)/(A) (%)
		本国向け	属領向け	合計(B)	
1936	475.7	466.1	2.8	468.9	98.4
1937	574.9	552.0	8.0	560.0	97.4
1938	556.6	517.6	12.5	530.1	95.2

(出所) 満鉄, 前掲書。

第4表 トウモロコシ輸出の全インドシナ輸出における比重

(単位: 100万フラン)

年次	インドシナ輸出総価額	トウモロコシ輸出	
		金額	比率 (%)
1928	2,937	90	3.1
1929	2,612	98.5	3.8
1930	1,840	61.1	3.3
1931	1,128	41.4	3.7
1932	1,019	74	7.2
1933	1,014.5	153	16.7
1934	1,060.6	192.6	18.6
1935	1,298.3	145	11.4
1936	1,681.9	294	17.5
1937	2,589.2	466.5	18

(出所) *Bulletin Economique de l'Indochine 1939*, Fascicule I.

同年の場合作付け面積8万6000ヘクタール、生産量が10万1000トンであったのに比べて、圧倒的優位を占めていた。第1表はカンボジアを中心に、フランス領インドシナ各邦における第2次世界大戦前のトウモロコシ生産の推移を示したものである。

当時のインドシナ産トウモロコシは北部産のものがハイフォン港から、南部産のものがサイゴン港から輸出されたが、量としては後者が断然多かった。カンボジア産トウモロコシは、コーチシナ、南部アンナン、ラオスなどの各邦産品とともにサ

イゴンに集荷され、そこから輸出されていたのである。第2表は戦前のカンボジアを含めた全インドシナのトウモロコシの輸出高の推移を示したものであるが、そのうちカンボジア産のものは、だいたい65% (1936~39年平均) を占めていた。輸出先としては当時の宗主国たるフランスが主で輸出高の97%とほとんど全量を占めており (第3表)、同国で家畜の飼料に使用された。1938~39年当時のフランスの赤トウモロコシ需要は126万2000トンに達していたのに対し、国内生産高は年間53万1200トンにすぎず、残りの約70万トンは輸入にまっほかはなかった。そこで特に注目されたのがインドシナなかんずく、カンボジア産トウモロコシで、フランスは自国植民地という当時のインドシナに対する政治関係や、それに伴って両国間に設定されていた特惠関税制度を利用して、インドシナ産トウモロコシを多量にかつ排他的に輸入したのである。第2次大戦直前のインドシナは、かくしてオランダ領のインドネシアをはるかに抜き去り、アジアで第1位のトウモロコシ輸出地帯となった。こうした刺激を受けて、カンボジアのトウモロコシも輸出農産物として前述のような急速な発展を遂げたのであった。当時の全インドシナ輸出価額中に占めるトウモロコシの比重をみるに1930年代にはいって重要な地位を占め、米に次いで第2位となり、1937年には全輸出価額の18%を占めていた (第4表)。したがって、同年その67%を占めていたカンボジアのトウモロコシ輸出は、その価額において全インドシナ輸出総額の12%を占めていたといえよう。

なおカンボジアのトウモロコシには白色種 (白トウモロコシ, *Maïs blanc*) と黄色種 (赤トウモロコシ, *Maïs roux*) の2種類があるが、輸出されているのはこの当時も現在ももっぱら赤トウモロコシ

であり、白トウモロコシは住民の生食用に使用されている。前掲第1表のカンボジアのトウモロコシ生産額は、この赤トウモロコシのほかに白トウモロコシが含まれているのかどうか明らかでないが、いずれにしてもその大部分が輸出用の赤トウモロコシであったことはまちがいない。その赤トウモロコシについて、1935/36年度から1938/39年度に至る4年間のヘクタール当たり平均収量は1.4トンであった (注1)。

## 2. 第2次世界大戦期

第2次世界大戦にはいってからのカンボジアのトウモロコシは、大戦前に比べて急激な減退をみたことはまちがいないところである。第5表によれば、この期間、作付け面積、生産量、輸出量すべて大戦前に比べて著しく減退したことを示しており、ついに終戦を迎える1945/46年には作付け面積1000ヘクタール、生産高1500トンに落ち込んでしまった。ヘクタール当たり収量も平均0.9トンと、前時期に比して著しく減退したことを示している。こうした事態を生んだ原因としては、大戦中のインドシナにおける政情不安やフランス本国からの孤立化からくる栽培上の諸困難が指摘されよう。当時フランス本国への海上輸送の困難などのために、カンボジア産トウモロコシはその最も重要なフランス本国市場を喪失せざるをえなかった。当時ヨーロッパのトウモロコシ市場に供給さ

第5表 第2次世界大戦中のカンボジア赤トウモロコシの生産と輸出

年次	作付け面積 (ヘクタール)	生産高 (トン)	ヘクタール 当たり 収量(トン)	輸 出 高	
				年次	(1000 トン)
1940/41	267,000	190,000	0.7	1940	300
1941/42	179,000	160,000	0.9	1941	150
1942/43	150,000	120,000	0.8	1942	95
1943/44	110,000	80,000	0.7	1943	25
1944/45		42,000		1944	
1945/46	1,000	1,500	1.5	1945	

(出所) *Royaume du Cambodge, op. cit.*, より作成。

れたのはアメリカ産の交雑種 (hybrid) トウモロコシであった。

### 3. 第2次世界大戦直後期

1945年夏、第2次大戦は連合国側の勝利をもって終了したが、インドシナにおいてはそれに引き続いて翌年から、いわゆるインドシナ戦争が起こり、この地域での平和回復は1954年7月の「インドシナに関するジュネーブ協定」の成立を待たねばならなかった。この間カンボジアにおいても、ベトナム、ラオス両国に比しては僅少であったとはいふものの、戦争の被害を被ったことに変わりはない。しかし一方で、この国は1949年以来、数次にわたって政治的独立が強化され、ついに1953年10月に完全独立を成就するにいたったが、実質的にその成果を享受できたのはやはり前述のジュネーブ協定成立以後のことであったといわねばならない。

さてこうした第2次大戦後の混乱期に、カンボジアのトウモロコシ生産はいかに推進されてきたのであろうか。第6表は、この時期におけるカンボジアのトウモロコシ生産状況を示したものである。これによると、この時期のカンボジアのトウモロコシ生産は、インドシナ戦争の影響や年ごとの自然条件の良否などによって、年によって相当の変動は示しながらも、大勢としては漸次回復しており、最低水準を示した終戦年1945/46年の1500トンから、1953/54年度にはついに10万トンの水準にまで回復するにいたった。これが戦前の水準に遠く及ばないことは改めていうまでもない。一方当時期における輸出は1947年の1万2000トンから1952年には6万9000トンにまで回復しているが、これまた戦前水準に比べればまだ5分の1程度にすぎない。またヘクタール当たり収量も平均1.3トンとなっており<sup>(注2)</sup>、第2次大戦中の0.9トンに

第6表 戦後期のカンボジアにおける赤トウモロコシの生産と輸出

年次	作付け面積 (ヘクタール)	生産高 (トン)	ヘクタール 収量 (トン)	輸 出	
				年次	輸出高 (1000トン)
1945/46	1,000	1,500	1.5	1945	
1946/47	5,500	5,500	1.0	1946	
1947/48		20,000		1947	12
1948/49	65,000	90,000	1.4	1948	63
1949/50		53,000		1949	45
1950/51		62,000		1950	32
1951/52		75,000		1951	66
1952/53		77,000		1952	69
1953/54		77,000		1953	52

(出所) 輸出と1948/49年度までの生産とは第5表に同じ。1949/50年度以降の生産は、改訂版カンボジア農業省資料(拙稿「カンボジアにおける農業基本統計の改訂について」、『アジア経済』、1965年1月号、参照)による。

比べればかなり回復したものの、戦前の1.4トン水準にはまだもどっていない。

この時期においては、第2次大戦中と同様、トウモロコシ生産にとって重要な品種の選択事業が頓挫しており、したがって農家の自家留保種子による生産によって多くの雑種を生んだのが実情であった。本格的な育種事業は次の時期を待たねばならなかったのである。

### 4. 独立後の時期

そこで最後に、独立以後のカンボジアのトウモロコシ生産はどのように推進されてきたのであろうか。1955年以後のカンボジアでは、戦乱のあった前時期に比べて政治的にも著しく安定をみ、シアヌーク前国王が組織したサンクム(Sungkum, 人民社会主義共同体)の下に全国民が結集して、独立回復後の国づくりに最大の努力を傾注するにいたった。この間、経済開発政策として中共援助を軸とした工業化政策と並んで農業開発政策が特に重視されたが、全人口の80%までが農民であり、農業が国内国民総生産の41%を占める(1959年)といった、まったくの農業国家であるこの国の経

済開発策としては、当然の措置であったといえる。

問題のトウモロコシ生産についても、こうした農業開発政策の一環として、育種事業を初めとして種々の増産策が叫ばれてきた。そして第7表に示されるように、その成果にはみるべきものがあったといえる。すなわち、まず作付け面積についてみるに、1954/55年度の6万2000ヘクタールから

第7表 カンボジアの独立後の赤トウモロコシの生産と輸出

年次	作付け面積 (ヘクタール)	生産高 (トン)	ヘクタール 当たり 収量 (トン)	輸 出	
				年次	輸 出 高 (1000トン)
1954/55	62,000	79,000	1.3	1954	97
1955/56	63,000	84,000	1.3	1955	66
1956/57	73,000	97,000	1.3	1956	88
1957/58	79,000	107,000	1.4	1957	99
1958/59	87,000	98,000	1.1	1958	117
1959/60	96,000	127,000	1.3	1959	107
1960/61	103,000	143,000	1.4	1960	164
1961/62	106,000	125,000	1.2	1961	104
1962/63	104,000	150,000	1.4	1962	134
1963/64	105,000	170,000	1.6	1963	115
1964/65	117,100	110,000	0.9	1964	149

(出所) Banque Nationale du Cambodge, *Rapport Annuel, Exercice 1964* より作成。

1963/64および1964/65年度分はカンボジア農業省での筆者調べ。

第8表 トウモロコシ輸出の全輸出価額に占める比重  
(単位: 100万リエル)

年次	カンボジア 総輸出価額 (A)	トウモロコシ 輸 出 価 額 (B)	(B) (A) (%)
1955	1,402	151	17.0
1956	1,282	191	14.9
1957	1,798	177	9.8
1958	1,853	224	12.7
1959	2,104	193	9.2
1960	2,441	290	11.9
1961	2,220	192	8.6
1962	1,903	276	14.5
1963	3,116	241	7.4
1964	3,063	284	9.3
1965	3,690	178	4.8

(出所) 1964年まで Banque Nationale du Cambodge, *op. cit.*, 1965年は Banque Nationale du Cambodge, *Bulletin Mensuel*, mars 1966より作成。

順次増加して1964/65年度にはついに11万7100ヘクタールにまで達したが、これは約85%の増加である。一方、生産高は1954/55年度に7万9000トンであったのが、1963/64年度までに17万トンと2.2倍近くに増加を示した。ヘクタール当たり収量は1954/55年度の1.3トンから1963/64年度にはこれまでの最高の1.6トンに達している。この期間のトウモロコシの輸出は、1954年の9.7万トン、1955年の6.6万トンから逐年増加して、1960年には16.4万トンに達したが、翌1961年10.4万トンに激減し、以後回復して1964年には14.9万トンを示した。1955~64年の平均年間輸出力は11.4万トンであった。なお1965年には前年に比べて激減し、輸出力8.2万トンに終わっている。こうしたトウモロコシ輸出のカンボジアの年間総輸出に占める比重についてみるに、例年その価額は米、ゴムに次いで第3位を占めており、第8表に示されるごとく、総輸出価額の5%から17%、平均して10.9%に及んでいる。トウモロコシはかくしてカンボジアの外貨獲得商品の最も重要なものの一つとなっているのである。

一方、こうした赤トウモロコシに対して、住民の生食用に供される白トウモロコシの生産ももちろん継続されており、その生産額は赤トウモロコシに比べてきわめて僅少だとはいうものの、1954/55年度の2万1000トンから1963/64年度には3万4000トンに増大している(第9表参照)。

しかし、以上のような独立後のカンボジア政府による種々の努力にもかかわらず、これまでに到達したトウモロコシ生産の成果(1963/64年度赤白合わせて20万トン)は、前述した第2次大戦前の時代に比べてはるかに及ばず、ようやくその半分の水準にまで回復したにすぎない。

こうした現状を生んだことについては、次のよ

第9表 カンボジアの白トウモロコシ生産高  
(単位: 1000トン)

年次	生産高	年次	生産高
1949/50	16.2	1957/58	25.7
1950/51	17.0	1958/59	28.1
1951/52	19.3	1959/60	29.5
1952/53	19.9	1960/61	31.3
1953/54	19.0	1961/62	26.8
1954/55	21.0	1962/63	33.2
1955/56	20.4	1963/64	33.9
1956/57	24.3	1964/65	29.0

(出所) 1963/64年度まで前掲拙稿(『アジア経済』, 1965年1月号), 1964/65年度はカンボジア農業省での筆者調べ。

うな理由が考えられる。

まず第1に、独立後のカンボジア政府は農業多角化政策を推進してきたが、その結果トウモロコシの有力な競合作物(落花生、甘藷、緑豆、綿花、タバコなど)が多数出現し、それが増産されるにいたったことである。このために、トウモロコシの作付け面積の伸びがどうしても抑制される傾向をもったことは否定できない。戦前にはこうした競合作物はまったく存在せず、トウモロコシ栽培が本来多くの労力を要せず簡単に栽培できることもあって、メコン沿いの肥沃な畑地帯の大部分がトウモロコシ栽培に当てられていたのである。ここに戦前のトウモロコシ生産と戦後のそれとの最も大きな条件の差が存在するのであり、ただ生産高の数量的低さだけをとりてこれを低く評価するのは、必ずしも妥当ではなからう。この国の農業開発という広いわく内におけるトウモロコシ生産の地位を十分考慮した上で、現状に対する評価を下す必要があると思われる。この場合、もちろん、トウモロコシ生産における栽培法そのものに、おおいに改善すべき余地があることはいうまでもない。

近年におけるカンボジアのトウモロコシ生産が伸び悩んでいる第2の大きな原因としては、戦前

から最大の輸出先であったフランス本国が戦後トウモロコシの生産国として伸び、近年では逆に輸出に転換したため、同国を最大市場としていたカンボジアのトウモロコシ輸出が大打撃を被るにいたった点があげられる。カンボジア政府はこのため、フランスに代わる新市場を日本、香港、シンガポール、中共、北ベトナムなどアジア諸国に求め、安定した市場の確保と販路拡張に努力しているが、なかなか思うようには成功していない現状にある。その原因の一つは、カンボジア産トウモロコシの輸出価格が国際価格、特に隣国タイ国産品に比べて割高である点があげられている。栽培技術の改良と並んで、当面集荷・流通機構の整備によっても、こうした不利は多分に改善しうるものと思われるが、現状ではまだその整備・改革が十分にはなされていないといわざるをえない。

カンボジアのトウモロコシ生産はこのように、生産の面でもまた集荷・流通の面でも種々の問題をかかえているといえよう。

(注1) Sun Chhum, *Le maïs au Cambodge*, Ministère de l'Agriculture, Phnom-Penh, 1964, p. 1. この報告によれば、カンボジアにおける1935~39年度の赤トウモロコシの平均作付け面積は25万ヘクタール、生産高は35万トンとされており、特に作付け面積の点で前掲第1表とかなりの相違がみられる。

(注2) 1964年に1949/50年度以降の農業生産統計に関する改訂がなされたが、それまでのカンボジア農業省発表の旧統計では、1949/50年度のトウモロコシ生産について作付け面積2万8000ヘクタール、生産高4万7000トン、1950/51年度は2万4000ヘクタール、3万5000トン、1951/52年度は9万トン、1952/53年度は10万トン、1953/54年度が12万ヘクタール、11万トンと発表されていた。新統計ではこの期間に関して生産量のみが発表され、作付け面積についての発表がないので、ヘクタール当たり収量に関する資料が得られない。

## II トウモロコシ生産の現状と問題点

カンボジアのトウモロコシの主要生産地帯は戦前から現在まで一貫して、カンダル (Kandal)、プレベン (Prey Veng)、コンボンチャム (Kompong Cham)、クラチエ (Kratie) のメコン河本流沿いの4州である(第1図参照)。第10、11表は1963/64年度および1964/65年度のカンボジアのトウモロコシ作付け面積と生産高を示したものであるが、これらによっても全国作付け面積および生産高において、その90%以上が前記メコン河沿い4州によって占められていることがわかる。とくに輸出用の赤トウモロコシは全量がこれら4州で生産されている。このようなトウモロコシ作付け面積に占めるメコン沿い4州の圧倒的比率は毎年ほぼ同様である。

ところで、このようにメコン沿い4州にトウモロコシ作付け面積が集中している原因としては、この沿岸地域の土地が毎年雨期の定期的洪水・氾濫によって、メコンの肥沃な泥土が10センチから20センチ近くも堆積するために非常に肥沃化されていて、トウモロコシ栽培においても施肥の必要

なしに高い収量を維持することができる点があげられる。さらにこの流水客土が病虫害および雑草の駆除にもおおいに役だっていることも見のがせない。もっとも、こうしたメコン河沿岸の氾濫地帯の中でも各地域によって泥土堆積状況は一様でなく、したがって生産力も地域別に多様性をもっていることは留意しておく必要があろう。

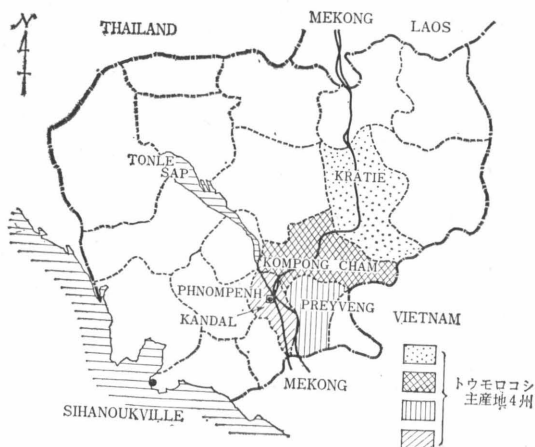
つぎに作付けされているトウモロコシの品種についてみると、そのほとんど全部が在来の硬粒種 (flint) である。これには白色種と黄色種の2種類が

第10表 1963/64年度カンボジアのトウモロコシの州別、種類別、季節別、作付け面積と生産高  
(単位: ヘクタールおよびトン)

		黄色種		白色種	
		作付け面積	生産高	作付け面積	生産高
Battambang	{ 雨期 乾期	—	—	90	140
Kampot	{ 雨期 乾期	—	—	100	160
Kandal	{ 雨期 乾期	24,500	39,500	1,400	2,160
	{ 雨期 乾期	10,000	16,000	3,000	4,620
Kompong Cham	{ 雨期 乾期	18,000	29,000	2,800	4,310
	{ 雨期 乾期	7,000	11,500	1,200	1,850
Kompong Chhnang	{ 雨期 乾期	—	—	560	860
	{ 雨期 乾期	—	—	20	30
Kompong Speu	{ 雨期 乾期	—	—	60	90
	{ 雨期 乾期	—	—	70	110
Kompong Thom	{ 雨期 乾期	—	—	100	160
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Kratie	{ 雨期 乾期	5,000	8,000	2,000	3,080
	{ 雨期 乾期	3,500	6,000	800	1,230
Prey Veng	{ 雨期 乾期	23,500	38,000	7,160	11,030
	{ 雨期 乾期	13,500	22,000	2,000	3,080
Pursat	{ 雨期 乾期	—	—	450	690
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Siemreap	{ 雨期 乾期	—	—	20	30
Stung Treng	{ 雨期 乾期	—	—	50	80
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Svay Rieng	{ 雨期 乾期	—	—	20	30
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Takeo	{ 雨期 乾期	—	—	100	160
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Koh Kong	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
合計	{ 雨期 乾期	71,000	114,500	14,910	22,980
	{ 雨期 乾期	34,000	55,500	7,090	10,920
総計		105,000	170,000	22,000	33,900

(出所) カンボジア農業省資料。

第1図 カンボジアのトウモロコシ主産地帯



第11表 1964/65年度カンボジアのトウモロコシの州別、種類別、季節別、作付け面積と生産高  
(単位：ヘクタールおよびトン)

		黄色種		白色種	
		作付け面積	生産高	作付け面積	生産高
Battambang	{ 雨期 乾期	—	—	720	1,080
Kampot	{ 雨期 乾期	—	—	680	1,020
Kandal	{ 雨期 乾期	32,000	30,000	1,790	2,670
Kompong Cham	{ 雨期 乾期	17,000	16,000	1,360	2,040
	{ 雨期 乾期	19,000	18,000	2,000	3,000
Kompong Chhnang	{ 雨期 乾期	10,100	9,500	730	10,090
	{ 雨期 乾期	—	—	760	1,140
Kompong Speu	{ 雨期 乾期	—	—	40	60
	{ 雨期 乾期	—	—	80	120
Kompong Thom	{ 雨期 乾期	—	—	200	300
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Kratie	{ 雨期 乾期	6,500	6,000	1,820	2,800
	{ 雨期 乾期	5,000	5,000	270	400
Prey Veng	{ 雨期 乾期	20,500	19,000	6,550	9,800
	{ 雨期 乾期	7,000	6,500	1,250	1,870
Pursat	{ 雨期 乾期	—	—	770	1,150
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Siemreap	{ 雨期 乾期	—	—	70	100
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Stung Treng	{ 雨期 乾期	—	—	30	40
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Svay Rieng	{ 雨期 乾期	—	—	70	100
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Takeo	{ 雨期 乾期	—	—	130	190
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
Koh Kong	{ 雨期 乾期	—	—	10	15
	{ 雨期 乾期	—	—	—	—
合計	{ 雨期 乾期	78,000	73,000	15,740	23,525
	{ 雨期 乾期	39,100	37,000	3,660	5,475
総計		117,100	110,000	19,400	29,000

(出所) カンボジア農業省資料。

あるが、先の第10、11表でも明らかなように、後者が圧倒的に多く、例年全生産量の約80%を占めている。白色種が住民の生食用に供せられるのに対して、黄色種は飼料用に国内消費されるのはまったくの微量で、生産高のほとんど全量が輸出用に当てられていることはすでに触れた。カンボジア農業省がこうした在来種から育成した黄色種の Camsyn 60 や CAS 63 などは、在来種に比べて多収で粒質が斉一粒色あざやかであり、かなり優秀なものようである。同省ではこの CAS 63 の採

種を行ない、僅少なから(年間約20トン)王国合作社(OROC)を通じて一般農家に販売している。

さて、トウモロコシ栽培には雨期作と乾期作があるが、これまた先の第10、11表から明らかなように、雨期作が圧倒的に多く、年間全生産量の約80%までが雨期作によるものとなっている。カンボジアはモンスーン地帯に属しており、1年のうちで北東風の吹く時期と南西風の吹く時期とが規則正しく交代し、ここに乾期(11~4月)と雨期(5~10月)がはっきりと区別されており、この国の農業はこれに強く規制される場所となっている。とくに降雨量の多少とその分布は洪水もしくは早ばつという両側面において、この国の農作物の生育と密接な関係をもっているのである。したがって、治水ないし利水の方策の良否いかんがこの国の農業生産を安定させ、あるいは増大させるための最大の鍵とされるわけである。前掲第7表によってもわかるとおり、1964/65年度作が前年に比べて、30%と非常な減産となったが、これは1964年雨期の降雨の分布状況がトウモロコシ栽培に好適でなかったことによるのである。

さて、カンボジアのトウモロコシ栽培の実際についてみるに、雨期作の場合、4月から5月にかけて、すなわち雨期の初め土壌がある程度湿ったところに圃場の耕起・砕土を犁で行なった後、播種するのが普通であるが、その適期幅は1カ月くらいある。播種があまり遅れると収穫時期前に氾濫が到来して被害を被るおそれがある。カンボジアのトウモロコシ栽培品種については、特にこの洪水氾濫期との関連において、その生育期間が問題とされるわけであり、メコン沿岸地域においては一般に90日を越えるものは不適當だとされている。しかし、いかに90日以内で成熟する品種を栽培していても、雨期の降雨状況は毎年様でない



ために、年によっては降雨が雨期の早い時期に集中してメコンの大氾濫が起き、そのために生育中のトウモロコシが大被害を被ることも少なくな

い。  
トウモロコシの播種方法としては、播種機によって点播するものもあるが、棒を用いて播種穴を作り点播する場合が最も多いようである。いずれにしても条播より点播が多く、1株5～6粒に仕立てられている。栽培密度は畦幅80センチくらい、株間60センチくらいが一般的である。甘藷や緑豆との混播が割合多い。

播種後の間引きはあまり行なわれていないようであるが、生育の悪い株については全部刈り取り、牛の青刈り飼料として利用している。

施肥は一般には行なわれていない。メコン河沿いの洪水氾濫によって肥沃土が多量に沈澱・堆積する所では施肥の必要がないが、それはきわめて条件のよい場所に限られるのであって、メコン河沿岸の全域が施肥の必要なしというのではけっしてない。メコン河沿岸以外の地域においては、もちろん施肥の必要性が認められる。しかし一般農家には堆肥製造の習慣もなく、また非常に高価な輸入肥料を購入するだけの家計の余裕がないなどの事情もあって、一般農家ではトウモロコシ栽培においても米その他の農産物栽培においても、肥料はほとんど利用されていないのが実情である。

トウモロコシの病害としては、「煤紋病」や「鏽病」などが見られるが、とくにこれに対する措置は講じられていない。害虫はあまり多くないようである。

収穫は播種後約90日を経た時期、すなわち7月から8月にかけてまだメコンの氾濫の来ないときに行なわれる。手または鎌で摘みとられ収穫された穂は、一般には農家の家屋内に積み込んで家屋

や庭先に広げて乾燥させる。特別の収納舎をもっている農家は一部の大面積栽培農家に限られる。脱粒には、最近移動式動力脱粒機が利用されており、これを持たない農家は金を出して(1トン=50リエル)委託している。

以上は雨期作のトウモロコシ栽培法について、その概略を述べたものであるが、乾期における栽培においても栽培方法そのものには変わりはない。乾期作の場合、播種は雨期明け後の11～12月、まだ土壤に適当な水分が残っている時期に行なわれ、収穫は翌年2月から3月にかけて行なわれる。

なおカンボジア農業省の計算によれば、カンボジアのトウモロコシの生産費はヘクタール当たりで2540リエルとなっており、ヘクタール当たり(赤、白および乾期、雨期合わせての)平均収量は1.5トンであるから、1トン当たりの生産費は1690リエルということになる<sup>(注3)</sup>。

以上が現在のカンボジアにおけるトウモロコシ栽培の概況であるが、そこでの改善すべき問題点としては、以下の諸点があげられよう。

まず第1に栽培技術の改善である。このうち、とくに灌漑施設の充実・強化が早急に必要であると思われる。現在のような完全に自然条件に依存した栽培法では、その作柄は安定せず、年ごとの降雨・早ばつ状況の変動によって生産高の変動も非常に大きいものとなっている。したがって、今後はまずこの灌漑設備の強化によって作柄を安定させることが必要であろう。そのことは雨期作についてはもちろんであるが、さらに現状では、灌漑設備の不備のために常に早ばつの危険にさらされ、そのために作付け面積も少なく作柄不安定でヘクタール当たりの収量も低い乾期作について、特にその必要性が痛感される。そして、そのことは作付け面積の拡大、作柄の安定、収量の増大を

将来し、結局はこの国のトウモロコシ増産という根本問題につながることになる。灌漑施設の充実方法としては、(1)溜池造成、(2)河川よりの導水、(3)泥土灌漑(雨期氾濫時の肥沃泥水を導入し、これをせき止める)、の3方法が考えられる。

そのほか、栽培法に関する改善としては、農具の機械化促進、施肥、病虫害対策の強化など、さらにはこれら栽培法の技術者による指導の点においても改善すべきところがあると思われる。これらについて、現状ではほとんどみるべき施策が講じられていないようである。かつて戦前、この国のトウモロコシ栽培全盛時代にはフランス人の栽培指導がよく行なわれ、農具の機械化もある程度進められており、そのなごりとして現在でも播種機などが若干の地方で利用されているが、それはきわめて少ない。同様に、耕起、砕土機、脱粒機なども、その所有者はきわめて限られた協同組合機関とか集荷業者、富裕農家だけのようである。技術指導の面ではまた戦後においてもプノンベン郊外のトウモロコシ栽培地帯(Chrui Dang)において、アメリカ人専門家による栽培指導がカンボジア政府技術者との協力下に1年あまり行なわれていたようであるが、上述のアメリカ援助拒否以来これも停止されたままであり、現在カンボジア政府による栽培指導もほとんど行なわれていないようである。

そこで今後是非とも栽培指導が再び実施されることが望まれるわけであるが、その型としては、すでにこの国(とくに Andœuk Hep を中心とする新開地)でフランス人技術者の協力をえて実施されてきた綿花栽培指導がおおいに参考になるものと思われる。そこで栽培指導は、技術面においてフランス人、カンボジア人農業技術者の協力下に研究と指導、普及が担当され、一方資金面と集荷

・加工については協同組合が担当する仕組みになっており、これまで非常に円滑に進捗してきている。この場合のフランス人の役割を今後トウモロコシ栽培においては日本人専門家が担当することも十分考えられることであろう。

第2に品種改良の問題がある。カンボジアの在来種トウモロコシが、一般に粒色あざやかな杏色で、粒質硬く、斉一で、小粒であり、その品質の良さについてはすでに国際的に高く評価されている。日本へも鳩飼料としてこうしたカンボジア産トウモロコシが例年輸入されている。

ところで、この在来種もそこから育成された合成品種 CAS 63 も、多収性という点ではなお多くの改良すべき点があるようである。そこで最近、多収確保という観点からカンボジアにも交雑種トウモロコシを導入する気運が高まり、そのために在来種(および在来種を親として育成された品種)と交雑種(Flint または Semi-Flint)との比較試験が1964年以来国内各地の試験場で行なわれてきた。その結果、交雑種のうち Semi-Flint が最も優秀であり、無肥料でも在来種に比して約28%の増収が期待され、施肥を行なえば約70%の増収が得られ、さらに灌漑を適切に行なえば200%の増収を得られるものと考えられるにいたった(注4)。なお、この交雑種トウモロコシを導入する場合、その種子の価格は在来種(通常1キログラム4リエル、OROC経由2.1リエル、なお1リエルは公定で10円強、実勢で約5円)に比べてかなり高価(1キログラム15リエル)であるが、約28%の増収を考えると、この高価な種子を利用してなお十分採算が合い、ヘクタール当たり約470リエルの収入増を期待することができるものと思われる(注5)。

かくして、最近のカンボジアではこの交雑種トウモロコシ導入の機運が熟してきた。近い将来、

多収性ととも病害に対する抵抗性、生育日数、対早ばつ性などを考慮した上で、カンボジアに導入すべく最も適合した優良品種が決定されるものと思われる。この優良新品種の導入とその普及によって、カンボジアのトウモロコシに多大の増産を期待することが可能とならう。

カンボジア政府としても、こうしたトウモロコシ増産プロジェクトの促進を重視し、各種農産物の増産を図るために設立しようとしている半官半民会社 SOCTROPIC (注6) (熱帯作物栽培公社)の最初の事業として、この新品種導入によるトウモロコシ増産を採り上げ、目下その具体化を急いでいるところである。

(注3) Direction de l'Agriculture, Royaume du Cambodge, *Bulletin de la Statistique et des Etudes Agricoles*, 2ème Année No. 4, janvier-février-mars 1964, p. 46.

(注4) 1次産品調査団(1966年2~3月)の現地での調査(筆者も参加)による。なお、1次産品問題処理対策会議「カンボジア1次産品問題調査報告書」(未定稿)、第2章参照。

(注5) まずヘクタール当たり必要種子の量は30キログラムであるから、在来種の種子価格は、4リエル×30キログラム=120リエルとなり、一方 Hybrid maize 種子の価格は、15リエル×30キログラム=450リエルとなるので、結局330リエルが種子代増加分となる。つぎに収量増加によるヘクタール当たり収入増を計算すると、1900リエル(1トン当たり農家庭先価格)×1.5トン(平均収量)× $\frac{28}{100}$ =798リエルとなる。結局、新品種導入によるヘクタール当たり収入増は、798-330=468リエルとならう。

(注6) SOCTROPIC とは、Société Mixte des Cultures Tropicales の略。1964年10月にカンボジア政府によってその設立が公表された。予定される資本金は3000万リエルで、カンボジア政府が40%、残りの60%は国内および外国の民間資本の参加を予定している。現在、カンボジア政府はトウモロコシ生産による日本の資本参加を期待し、一方近年カンボジアのトウモロコシの主要輸入国となっている日本側としても、

その開発輸入によって貿易アンバランス是正に貢献しかつ日カ経済協力としても有意義であるので、これに参加する意向を示しており、目下、その具体化につき日カ両国の関係者の中で協議が推進中である。本来、この SOCTROPIC はトウモロコシを初めとして、ジュート、綿花、サトウキビ、茶など、各種熱帯作物の大規模生産を図るために設立されるものである。

### III トウモロコシの流通の現状と問題点

#### 1. 貿易国営化との関連

従来、東南アジア諸国における商業、流通面において、華僑がその実権を握ってきたことはよく知られているところであるが、カンボジアにおいてもこうした事情は他の近隣諸国とまったく同様であるといえよう。

華僑のカンボジアにおける歴史は古く、アンコール時代の13世紀末にはすでに相当数の華僑がこの国に在住していたことが知られており、19世紀後半(1863年)以来90年にわたってこの国がフランスの植民地統治下におかれていた時代には、華僑は完全にこの国の経済の中枢部にまでくい込んでいた。現住民たるカンボジア人に商才や企業心が乏しい一方、フランス人たちは現住民の慣習にうとく言語にも通じないため、現住民との直接取引を行なうことは少なく、いきおい現住民とも親しく商才にたけた華僑がこれら両者間に介在して重要な経済的役割を果たすことになったのである。カンボジア農民によって生産された米、トウモロコシなどの農産物は、村の雑貨商から地方都市集荷商へ、さらに仲介人の手を経て問屋へといった、華僑の網の目のように張りめぐらされた組織を通じて集荷され、さらに同じ華僑の大資本家たる輸出入商によって海外に輸出されることも多かつた。ただ、第2次大戦前のトウモロコシ輸出については、前述したように特にフランス向けが

多く、したがって主としてフランス系大商社によって輸出されていたようである。華僑はまた外国から輸入された商品の国内販売を担当し、この場合は集荷と同じ組織網を逆にたどって国内各地に売りさばいたのであった。

このような事情は、1953年10月にカンボジアが完全な政治的独立を回復して以後も、ごく最近までそれほど大きな変化はなかったといえよう。むしろ、かつての宗主国たるフランス勢力の後退によって、かれら華僑の勢力はこの時期にいつそう増大助長されたものとみなすことができる。ただ独立以前と独立以後で集荷流通面での最も大きな変化の一つは、独立以前はトウモロコシを含めてカンボジア産農産物がプノンペンからではなく、ほとんどすべてサイゴンに集荷され、そこから輸出されていたのが、独立後はプノンペンから、直接外国向けに輸出されるようになったことである。しかし、その集荷や輸出入に華僑系商人が重要な役割を果たしていた点は依然として変わりがなかった。カンボジアにはこうした華僑が約50万人おり（カンボジア全人口600万の8%）、そのうち約20万人はすでにカンボジア国籍を取得している。

ところが、1963年11月に至って、カンボジア政府がアメリカの軍人・経済援助の拒否と前後して「経済改革」を断行し、貿易、銀行、保険業務の国営化措置を実施したことは、この国の華僑の経済活動にも大きな影響を及ぼすにいたった。すなわちこの経済改革によって国有化の対象となった貿易業務・銀行にしても従来華僑勢力の強い分野であり、アメリカ援助を受け入れていた当時、それによって最大の利潤を得ていたのもこれら華僑商人であった。しかも華商たちはその利益の大部分を国外に逃避させる場合が多く、華僑資本はほとんどカンボジアの国家建設には役だたなかった

わけである。アメリカ援助拒否によって、かれら華僑が甘い汁を吸う機会は無くなったわけであるが、さらに経済改革の実施によって華僑資本を貿易面より閉め出し、その蓄積された資本を農業・工業など国内経済建設に投資させることによって、カンボジアの「自立更生」経済を実現するための重要な役割の一環を、かれらにになわせようというのが、カンボジア政府の意図であったとみられる。貿易国営化に伴って設立された国営輸出入公社（SONEXIM=Société Nationale d'Exportation et d'Importation）は1964年初からその活動を開始し、最初は事務の不なれ、専門家の不足などによって円滑にいかなかったが、華僑の協力を呼びかけた政府に対して、自らの資本を保護するためにもこれに協力することが得策と考えた華僑も多く、こうしたカンボジア国籍取得華僑の登用によって、SONEXIMの経験不足といった欠点も補われ、その後しだいに経営も軌道にのってきている。

カンボジア政府は、このようにまずSONEXIMを設立して輸出入面でのイニシアチブを華僑の手から政府の手に取りもどしたわけであるが、目下第2に打つべき手段として、国内流通面でのイニシアチブを同様に政府の手に掌握すべく、関係政府機関たるOROCの強化に力を注いでいるのが現状である。

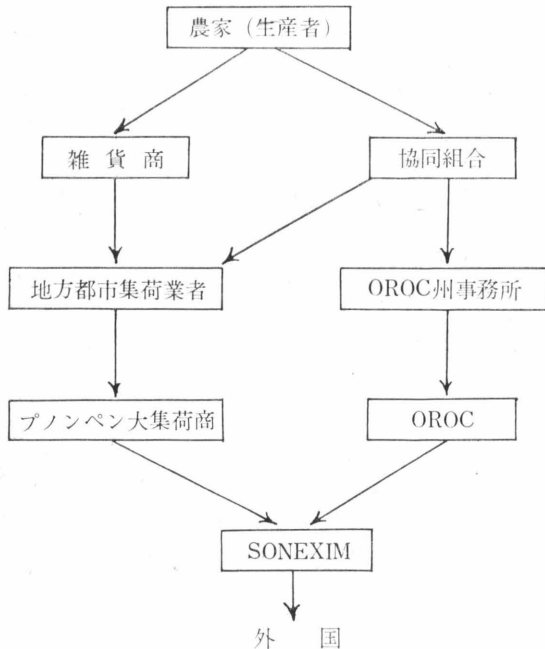
このようなカンボジア政府の漸進的な経済改革政策は、カンボジア経済の実状に即したまことに適切な措置であると思われるが、はたして現状でのその成果はどうであろうか。また前述したような華僑の集荷網は、貿易国営化以後どのようになっているだろうか。これらの点について検討するためにつぎにOROCの活動を中心として、カンボジアのトウモロコシの集荷の現状を探ってみよう。

## 2. トウモロコシの集荷・流通の現状

現在のカンボジアにおけるトウモロコシの集荷・流通形態には、第2図に示されるように、大きく分けて政府機関たる OROC によるものと従来からの華僑系民間商人によるものとの二つの形態があるが、容易に想像されるように、これまでのところでは後者の形態が圧倒的に多い。筆者の現地での調査によれば、OROC によって集荷されているトウモロコシは全輸出量のわずか10%足らずであり、残りの約90%はすべて華僑系の民間商人によって集荷されているのである。華僑によって長年月にわたって強固に確立された集荷体制の前には、政府機関でしかも成立後日も浅く資本も人材も十分でない OROC のあまりにも弱い集荷能力では、歯が立たなかったわけである。

華僑はトウモロコシの集荷に当たっていわゆる「青田買い」を多く行っており、すでに播種期

第2図 カンボジアにおけるトウモロコシの集荷流通機構



に農民に対して60%くらいの前渡金を与えるのが普通のものであり、収穫期において包装用麻袋を用意して各農家を回り、現物を集め代金を支払うが、その際前渡金との決済を行なう。こうした華僑の集荷網のいわば末端細胞としての役目を果たしているのは、僻村のすみずみにまで散在する雑貨商である。平常からこの雑貨商は、付近の農民に対して営農資金はもちろんのこと生活資金のめんどろまでみてやり、金を貸し付けている場合が多いので、その借金の返済のためにも農民が収穫した農産物はどうしてもこの雑貨商に持ち込まれる場合が多くなるのは当然であろう。

こうして全国で数千軒を数える村の雑貨商に集荷されたトウモロコシは、つぎに地方都市の集荷業者の手を経て、最終的にはプノンペン在住の旧輸出商たる大集荷業者の手に集められる。プノンペンやその近郊に散在するこれら大集荷業者の10数カ所の倉庫で、篩掛け、看貫、袋詰めが行なわれる。そして、それが SONEXIM によって買い上げられるわけであるが、現在 SONEXIM の買い上げ価格はプノンペンの倉庫出し価格で1袋(100キログラム・ネット) 235 リエルとなっている。

従来、カンボジアの輸出農産物価格は国際価格に比べて割高だといわれ、それが輸出伸縮の一原因となっていたのであるが、SONEXIMはこうした自国の割高産品について現在自己コンペ制度(注7)の実施によって、その輸出増大を図っており、その効果を上げている。すべての輸出入がSONEXIMによってなされるべきことは前述したとおりであるが、最近までは旧輸出商たる大集荷業者がSONEXIMの買値とにらみ合わせてトウモロコシの買持ち、売越しなどの思惑を行なうほか、香港やシンガポールなど外国在住の華僑との緊密な従来のつながりを利用して事実上の輸出商談を行な

い、しかる後に SONEXIM で帳合いをし、SONEXIM 名義で輸出を行なうといった場合も少なくなかった。しかし、ごく最近では SONEXIM が輸出入に入札制度を採用しはじめたので、こうした弊害も漸次消滅しつつある。

なおトウモロコシの輸出時期であるが、この国の Large Crop たる雨期作のものが、プノンペン (Phnom-Penh) 港あるいはシアヌークビル (Sihanoukville) 港から積み出されるのは、作業の順序からいって最も好つごとと思われる 9~10 月がこの地域の雨期の降雨最盛期であるので、結局、雨期明けの 11 月から 12 月にかけて行なわれることになっている。もちろん翌年に持ち越される部分もあるようである。

倉庫および積出し時に 行なわれる検査は、SONEXIM の従属機関である COSUR (Coopérative de Surveillance pour les produits d'exportation du Cambodge) によって担当されている<sup>(注8)</sup>。

一方、OROC によって集荷される場合は、どのようになされているのであろうか。現在協同組合を結成している農民の場合でも、その組合が販売すべきトウモロコシを OROC に引き取ってもらいかまたは華僑系民間商人に売るかは、そのどちらでもよく、その時々々の価格と決済条件の良否によって組合員たちがどちらかを決めればよいことになっている。昨年 (1965 年) の場合、OROC の指示する最低販売価格は 100 キログラム・ネットの 1 袋が 190 リエルであった。ちなみにカンボジアのトウモロコシ 100 キロ当たりの生産費が 169 リエルとなっていることについては、すでに前述したとおりである。OROC 倉庫に引き取ってもらう場合は、OROC が包装用麻袋やトラックを用意して現物を引き取ることもあれば、農民自身 (組合) の責任で OROC 倉庫まで運搬することもある。前

者の場合には OROC が農家より OROC 倉庫までの運送費実費分を徴集する。したがって、農家の受取り分は 190 リエルよりその分だけ差し引いた金額ということになる。現在 OROC の地方におけるトウモロコシ用倉庫として、やや規模の大きいものとしてはカンダル州 Chruï Dang にアメリカ援助によって、建てられた倉庫 (収容能力 2 万 4000 袋くらい)<sup>(注9)</sup>と、コンボンチャムの OROC 州事務所に付属している倉庫の二つである。

OROC 倉庫にトウモロコシを納入すれば、その際概算金として 60~70% 程度が支払われる。次いで現物は OROC の地方倉庫からプノンペンに運ばれる。Chruï Dang の倉庫からの場合はトラックにより、コンボンチャムの倉庫からの場合は舢舨によってプノンペンの倉庫ないし直接本船にまで運ばれるのである。プノンペンの倉庫にはいった場合、1 袋 200 リエルになったトウモロコシは、諸々の処理を終わって SONEXIM に買い上げられ、倉庫出し価格 235 リエルで引き取られる。OROC はここで協同組合との支払い精算を行なう。以上が現在のカンボジアにおけるトウモロコシの集荷・流通機構の概要である。

### 3. OROC 活動の強化策

ところで、前述したようにカンボジア政府はトウモロコシ増産のための新会社 SOCTROPIC の活動を開始しようとしているが、その努力によって増産されるトウモロコシは、SOCTROPIC と同じ政府系機関であり、かつ目下国内流通機構の主役としての役割を果たすよう育成努力中の OROC の手によって集荷するようにならなければならないのは当然であろう。また単にこのような集荷活動のみならず、OROC はその信用活動を含めた農民への生産援助活動を通じて、生産増強の面でも SOCTROPIC に協力することができよう。

そこで、現状においては生産援助活動もまだ不十分であり、また前述したように集荷能力も非常に弱い OROC をどのようにして、いかなる点で強化すべきかについて次に考えてみることにしたい。

(1) まず第1に、現在までに約30%にまで進んだ農家の協同組合への組織化をもっと推進することが必要であろう。

OROCはその1956年の創立以来、農民の協同組合への組織化に努力を払ってきたが、特に1963年の経済改革以来その活動は従前に比して著しく活発になり、かなりの成果を収めてはいる。たとえば、経済改革の前年1962年末現在で OROC 加盟の協同組合数 253、組合員数 9 万 6048、資本金総額が 1100万1345リエルであったものが、逐年増加して、1965 年末現在では協同組合数 460、組合員数 31万9261、資本金総額 3783万3595リエルに達している(第12表)。このことはカンボジア全農家の約30%が協同組合に加入したことを示している。この比率は州単位でみるかぎり、トウモロコシ主産地のメコン沿い4州でもほぼ同様であるが、現地での聞き取りによれば、トウモロコシ栽培の中心地帯の村落では、この比率がもっと高い所も多く存在している。

OROCはカンボジア農民の生活水準向上のための協同組合活動推進のために創設された半官半民

の機関で、2億リエルの資本金(1株5000リエルの4万株)のうち政府が50%出資し、残りの50%は OROC 加盟の協同組合が出資することになっている。しかし、現状では協同組合は出資しておらず、OROCが銀行からの借入金をこれに振り向けている。協同組合に出資させていないのは、協同組合をできるだけ自主的に運営させようとする OROC 側の意向によるものとされている。

OROCの組織としては、まずプノンペンの本部に最高機関たる「行政評議会」を初め、行政・経理・協同組合活動、信用、供給および分配、企業の各局があつて活動の中心をなしている。一方、地方各州(現在13州)の州都には OROC の州事務所があつて、各州の協同組合を監督し、同時に州信用協同組合としての役割を果たしてきた(注10)。

ところが最近この国の協同組合活動にも重要な変化がみられるにいたつた。たとえば、これまで州信用協同組合と農村各協同組合との二つのルートによって行なわれてきた OROC の信用活動が、昨年(1965年)秋から前者つまり州信用協同組合の新規貸付活動は停止されており(このことは後掲第13表によってもうかがわれる)、現在では後者つまり農村各協同組合のルート1本にしぼられるにいたっている。なおその貸付については、最も多い短期貸付(だいたい1年、最高18カ月まで)の場合、OROCから協同組合への貸付利率は年間6%、協

第 12 表 トウモロコシ主産地 4 州を中心にしたカンボジアの協同組合結成状況 (1965年末)

州 名	組 合 数						組合員数	資 本 金 (リエル)
	合 計	州 信 用 協同組合	多 機 能 協同組合	消 費 協同組合	生 産 協同組合	学 習 協同組合		
カ ン ダ ル	67	1	32	25	6	3	54,140	5,548,148
プ レ イ ベ ン	22	1	16	—	1	4	28,466	2,077,502
コ ン ボ ン チ ャ ム	57	1	46	—	2	8	47,179	3,020,746
ク ラ チ エ	14	1	9	1	—	3	6,837	936,570
全 国	460	13	342	56	14	35	319,261	37,833,595

(出所) OROC 本部資料。

同組合より組合員への貸付利率は年間12%となっている。中期(2年ないし5年)貸付の場合は州事務所の仲介によって、OROCから直接協同組合員へ貸し付けられ、その年間利率は9%である。

さらに最近の協同組合活動における大きな特徴としては、従来の生産協同組合や消費協同組合といった各種協同組合が行なってきた諸活動を総合した多機能協同組合が中心となり、基本方向としてはこれに一本化しようとする傾向にある点あげられよう。OROCにより、今後こうした農民の協同組合への組織化がますます推進されることが望まれるわけである。

(2) つぎには、そうして組織された農業協同組合に対するOROCの生産援助活動を強化することが必要であろう。

従来農民たちは常に華僑に営農資金や生活資金を依存し、したがってかれらが生産した農産物も必ず華僑によって集荷されることになり、しかも常に安値に買ったたかれ、いつまで経っても農民は貧困にあえぐ結果になっていたのであるが、OROCの消費組合活動の強化とともに根本的には生産援助を強化することによって、こうした弊害は取り除かれ、農産物もOROCの手によって集荷されるようになることが期待されよう。

OROCによる協同組合への生産援助の方法としては、従来わずかながら行なわれてきた優良品種の種子分配やトラクターなど農業機械の導入を強化することがあげられるが、最も重要なこととして信用供与をも加味したポンプを初め灌漑設備の整備強化に対する援助がある。この灌漑設備の整備によって、現在のトウモロコシのヘクタール当たり平均収量(1.5トン)をさらに増大することが可能となり、また現在水が確保されないために作付けされていない広大な土地にも、新規にトウモ

ロコシ栽培を導入することが可能となる。こうして農民の農業収入を増大させ生活を安定化させることによって、従来の華僑への経済的依存から脱却させることができる。こうすればOROCの手によるトウモロコシ集荷もよほど容易になる。

問題はOROCの信用活動資金であるが、1965年末現在でOROCの(手工業および小工業貸付を除く)農業金融実施総額は1億5813万7000リエル(州農業信用金庫分1億5736万3000リエル、農業協同組合分77万4000リエル)で(第13表)、これを協同組合員1人当たりの額でみると、わずか495リエル(約5000円)にすぎない。今後この資金の大幅の増加がぜひとも必要となろう。

(3) さらに現在のOROCや協同組合には、トウモロコシ集荷に当たって必要とする倉庫設備や輸送能力が弱いので、これを強化する必要がある。

従来、農民たちは倉庫設備をもたないためにトウモロコシを初め農産物を売り急ぎ、そのために華僑商人に買ったたかれるというケースも多かったのであるが、最近では協同組合への組織化も進み、またそれら各協同組合には倉庫設備を持つようとのOROCの指導と援助もあって、倉庫設備を持つ組合もだんだん多くなってきた。しかしまだまだ十分といえる状態ではなく、またOROC自体の倉庫設備も前述のように不十分である。両者合わせて1965年3月現在の倉庫能力は25万立方メートルである。このため倉庫施設の増設や、同時にまたその設備内容の改善は、今後とも継続して行なわれる必要がある。

また輸送能力についても、現在OROC自体とOROC加盟の協同組合の保有分合わせてトラックは31台にすぎず、これは現在この国で稼働中のトラック総数が少なく見積もっても7000台を下らないと推測されることからすれば、わずかにその



第13表 OROCによる農業金融活動

(単位: 1000リエル)

	1962年 12月末	1963年 12月末	1964年 12月末	1965年 6月末	1965年 7月末	1965年 8月末	1965年 9月末	1965年 10月末	1965年 11月末	1965年 12月末
A. 州農業信用金庫										
預金	9,531	5,695	8,530	8,384	9,147	8,062	8,241	6,936	5,358	6,174
流動資産	1,941	5,920	30,349	10,301	12,503	15,082	16,132	16,515	14,190	4,820
組合員貸付	59,600	57,941	57,377	56,328	56,318	56,339	56,219	55,996	55,776	55,694
員数	154,601	154,718	156,844	158,068	158,657	159,424	158,834	158,140	157,549	157,363
金額										
B. 農業協同組合										
流動資産	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—
事業貸付	951	774	774	774	774	774	774	774	774	774

(出所) Banque Nationale du Cambodge, *Bulletin Mensuel*, Novembre, Decembre 1965, Février, Mars 1966 より作成。

0.5%を占めるにすぎない。

こうした輸送能力の不足を補うため、OROCはこれまで農産物の陸上輸送に当たって民間の運輸業者に委託する部分も多かった。またコンポンチャムを初め、メコン沿いの主産地からプノンペンへの船による河川輸送についても、事情はこれと同様であったといえる。

こうした実情から考えても、OROCに対する陸上・河川両面の輸送能力の強化策が早急に実現されるよう望まれるわけである。

なおこれは直接 OROC 活動ではないが、非常に密接な関連をもつものとして、プノンペン港やシアヌークビル港の設備改善が取り上げられる必要がある。現在の両港の荷役・設備能力ははなはだ不十分であり、したがってこれらの面での改善が、かねがね国際価格に比して割高だといわれるトウモロコシを初めカンボジア輸出農産物の国際競争力強化という点からも、緊急を要する実施課題ということになると思われる。

(4) 最後に OROC の重要な欠点としてあげられる商業面での経験や能力の不足という点を改善する必要がある。もっとも、この面でも OROC が最近種々の改善策を講じていることは事実のようである。たとえば、OROCにはその内部機関として米の集荷・加工を取り扱う SATRAR (Service

d'achats, de transformation et de reconditionnement du riz. 米穀購買加工乾燥機関, 1964年4月設立)や、輸入肥料や殺虫剤などの分配を独占的に取り扱う SADI (Service d'Approvisionnement et de Distribution. 調達分配機関, 1965年8月設立)があるが、これらの機関には経験豊富な華僑系の民間商人も登用されているように見受けられる。そして OROC が将来このような民間人との協力体制をますます推進していくことができるとすれば、トウモロコシや米を初め農産物の集荷活動を行なうに当たってもより能率的な運営を行なうことができるようになるものと期待される。またこのように政府機関によるイニシアチブ確保の下における政府・民間(華僑系)両者の協力体制を確立することこそが、カンボジア政府が先に実施した経済改革の真の意図に沿うことになるものと考えられる。

以上、中心に述べてきた OROC の強化策は、SOCTROPIC 設立や港湾施設改善など関連政策の実施と合わせて、初めてよりよい成果をもたらすことが期待される。

#### 4. 民間流通機構への対策

最後に、民間(主として華僑系商人による)流通機構への対策について考えておかねばならない。というのは、この民間流通機構が現状では、上述のごとくトウモロコシ集荷の90%までを担当してお

り、また目下カンボジア政府による OROC 強化策が推進されているとはいうものの、今後もおお、少なくとも当分の間は、カンボジア農産物流通の主役たる地位を保持するものと考えられるからである。

そこで、これに対する対策として当面考えられることは、トウモロコシの生産者最低価格の決定とその完全実施であろう。しかし、これについては若干の危惧ももたれないわけではない。というのは、すでに1963年末、もみ集荷について同様の施策がカンボジア政府によって試みられたことがあるが、大きな成功を収めることができず、結局は最低価格制の廃止という結果に終わっている前例があるからである。当時、銀行国営化への過渡期ということもあって、集荷業者によるもみ集荷資金が欠乏し、一方生産者たる農民はもみを売りたいが、いきおいもみ価格は下落の傾向をたどった。そこで政府は生産者保護の立場から、もみ生産者最低価格を定め、その完全実施をめざし、一方 SONEXIM の努力で政府に協力する約30の華僑系集荷業者に対しては政府から特別に集荷資金を貸し付けるなどして、もみの集荷に努力した。しかし、この政府からの集荷融資を受けえた集荷業者は国内もみ集荷機構全体からいえばその一部にすぎず、またその金額も少額であった(4億リエル)ため、もみ集荷は依然停滞傾向にあった。この間にあって、現金需要が強いにもかかわらず、生産者最低価格という制約のため売ることのできない農民からは生産者価格の廃止を要望する声が強くなり、ついに政府もその廃止に踏み切らざるをえなかったのである。

当時と現在では、政府と華僑系商人との関係など相当事情の異なってきた点もあるとは考えられるものの、今後トウモロコシ集荷における生

産者最低価格制実施において問題となるのは、やはり政府の統制力と資力であろうと思われる。したがって、カンボジア政府によるこの面での充実がまず要請されなければならないこととなる。

(注7) その実施方法としては、輸出を国際価格で行なうことを原則として、その際生ずる国内業者からの買上げ価格との差損を、奢侈輸入品の高価販売による収益などによって補填することとしている。

(注8) 輸出品の規格および検査については、SONEXIM, *Normes de Conditionnement* 参照。

(注9) この倉庫には、乾燥機、自動計量機なども備えられている。また耕起・砕土機を備え、近隣農家のために運転手付きで貸耕している。しかし、これらの機能は必ずしも十分に生かされていないようである。

(注10) OROCの組織と活動についてここでは十分に触れないが、それらについて簡単には OROC の宣伝パンフレット *OROC* (1966年刊) や *Rapport Annuel, 1964* など参照。

(調査研究部東南アジア第2調査室)